

第2回数値予報モデル開発懇談会への意見（青木委員）

台風や集中豪雨について挑戦的な目標を掲げ、精度向上を目指すことは有意義。予測の大幅な改善は、例えばスパコンの更新のみにより実現されるものではなく、一朝一夕のものではないことに広く一般の理解を得ながら、精度向上に向けて努力してほしい。

このような挑戦的な目標に向かって着実に前進していくためには、人事交流、組織連携も含め、関連する幅広い分野できちんとした体制をつくり、長期的な視点を持ってしっかり取り組んでいく必要があると思う。

気象庁はAIを以前から利用してきたと認識している。全く新規に導入するのではなく、AI技術の高度化を踏まえて更なる活用を目指している段階にあることをアピールするとよいのではないかと。

第2回数値予報モデル開発懇談会への意見（三好委員）

検証指標を見つけるのも良い研究テーマ。英国気象局の NWPIIndex の日本版のようなものや、より普遍的な指標も含めた検証指標のあり方等について研究コミュニティと共同で議論するのが良い。

気象庁が現業の観点で課題を明示し、研究コミュニティがそれに応える具体的な研究開発のアイデアを出して、それに対する研究開発資金のハンドリングを気象庁がドライブするという方向性が双方にとって有益。

R2O とともに O2R も同等に重要。米国と日本では研究コミュニティの規模が桁で異なるので、O2R の実施にあたっては、日本独自のやり方を模索すべき。

現場レベルの交流は、官学双方の人材育成にも有益。また、即戦力だけでなく、出前講座やシンポジウム等で子ども達を含めた裾野を広げる活動も重要。

気象庁数値予報課や気象研究所の研究開発要員の一部を任期制あるいはテニユアトラック的なポジションにするなどして、気象分野の人材流動性を高めることが、分野全体の活性化に役立つのではないか。